

2025

慶應義塾

サステナビリティレポート

Keio University
Tokyo, Japan

慶應義塾は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。



福澤諭吉筆「慶應義塾の目的」（1896〔明治29〕年）

Keio University

はじめに

「人身の安楽」と「人心の高尚」とを求める学塾

― サステナブルな社会を目指す ―

「文明とは人の身を安楽にして心を高尚にするを云うなり」―慶應義塾の創立者、福澤諭吉が、その著『文明論之概略』においてこのように「文明」を定義づけた時、彼の眼には確かに19世紀末の西洋で著しく進捗する機械の発明と技術革新が映っていました。「蒸汽船車、電信、郵便、印刷」の4つの発明が、西洋における歴史の原動力として人心を一新してきたことを看破した福澤はその限りで、それらの文明の利器の日本への熱心な導入者であったのです。

しかし、福澤はまた、技術や制度は文明の外形や有様に過ぎず、そこに人の心身における「安楽」と「品位」の進歩が伴って初めて文明の世が到来すると述べました。そして、この安楽と品位とは、智（Intellect）と徳（Moral）によって与えられるものであり、文明とは、とどのつまり智・徳の進歩である、と彼は断言します。ただし、人類社会は未だその段階に達していないとする福澤にとって、文明とは常に到達するその先の目標であり理想であったことに注意するべきです。

戦争による世界情勢の混沌、気候変動による災害の増加など、今、世界はめまぐるしく変転しています。サステナブルな社会を目指すためには、変化を柔軟に受け止め、課題を解決するための智と徳の拡充も常に求められています。

かつて「人身の安楽」と「人心の高尚」を目指した福澤が、その門下生に対し、「気品の泉源、智徳の模範」たらんことを求めた学塾の理念と伝統とが、今も変わらず慶應義塾の道標となっているのです。



福澤諭吉

目次

1 はじめに
2 SDG Initiatives at Keio University
3 塾長・SDGs担当常任理事メッセージ
4 Policy（ポリシー）
5 Environment（環境・資源保護）
9 DEI（協生環境）
13 Health&Well-being（健康・福祉）
15 Student Conference（塾生会議）
18 Keio SDGs News

SDG Initiatives at Keio University

慶應義塾がSDGsへの取り組みで目指すこと

慶應義塾は、創立者福澤諭吉の
「実学の精神※1」を基盤とし、総合大学としての強みである
分野横断的アプローチにより、
教育・研究・医療を通じた社会への
さらなる貢献を目指しています。

※1 実証的に真理を解明し問題を解決していく科学的な姿勢が、義塾伝統の「実学の精神」です。

慶應SDGsロゴ

Keio University
Tokyo, Japan

慶應義塾は持続可能な開発目標（SDGs）を支援しています。

学内において必要な取り組み、今後力を入れるべきことは何かを検証するPDCAサイクルの一環としたいと考えています。また、本報告書を通して、慶應義塾のサステナビリティを目指す取り組みへの理解、協力を得ながら、様々な連携を試み、一朝一夕には解決し得ない地球全体の課題について、取り組んでいきたいと考えています。

中期計画2022-2026

慶應義塾におけるSDGs

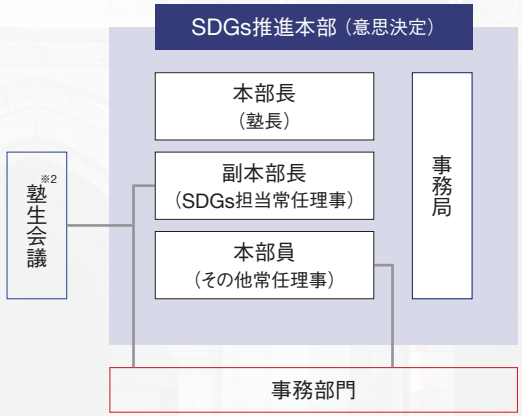
持続可能な開発目標（SDGs: Sustainable Development Goals）とは、2015年9月の国連サミットで採択された17の国際目標（ゴール）です。2030年までに、発展途上国と先進国双方が持続可能でよりよい世界を目指すための普遍的な目標で、「地球上の誰一人取り残さない」を理念として掲げ、貧困、不平等、気候変動、環境問題、平和と繁栄、正義などに関する17の目標と、169のターゲットから構成されています。慶應義塾も、大学病院を有する教育・研究機関として、世界と地域社会に貢献する研究大学として、SDGsに関連する様々な取り組みを行っています。

サステナブルな社会を目指す事業計画

慶應義塾は中期計画2022-2026において、中期的視点を持って実行していくべき重要な項目を取り上げています。そこにはSDGsの目標とする理念とも通底した、環境計画、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）などの実践と慶應義塾における一層の定着を目標とした計画も掲げられています。中期計画を基にして作成された年次計画のうち、サステナビリティを目指す活動に特化した項目をまとめた年次報告書が「慶應義塾サステナビリティレポート」です。

本報告書に示される成果や進捗により、サステナビリティに関わる事業計画の進捗を数値的・定性的に見える化し、

慶應義塾のSDGs推進体制



※2 塾生とは、慶應義塾で学ぶ在学生のことを示します。

協働の力で持続可能な未来を創る



塾長
伊藤 公平

慶應義塾が目指すのは、これからの社会を生きる人々が希望を持ち、一人ひとりの尊厳が大切にされる未来です。持続可能な社会を実現するためには、現状を正しく理解し、自ら考え、異なる立場の人々と対話しながら行動することが求められます。教育・研究・医療を担う慶應義塾は、「実学の精神」に基づき、分野を越えた知を結び付け、SDGsの達成と、その先のBeyond SDGsを見据えた取り組みを進めています。

本レポートでは、教育・研究・医療等を通じた、その実践を紹介しています。エネルギー使用量の見える化や資源循環は、キャンパスを学びと行動の場に変える取り組みです。「協生ステーションarcoiris（アルコイリス）」の開設や障害のある学生への支援は、誰もが自分らしく力を発揮できる環境づくりにつながります。百寿者研究、戦争の記憶の継承や国際司法をめぐる学術交流も、人間の幸福と平和を支える重要な営みです。

こうした課題は、一つの専門分野、一つの組織だけでは解決できません。総合大学としての知を結び、地域や企業、世界の大学等と対話し、協働することが不可欠です。同時に、未来を担う学生の声に耳を傾けることも大切にしています。「塾生会議」から生まれた資源回収や地域交流、地方出身学生への支援は、身近な気づきを変化につなぐ挑戦です。学生と教職員が共に学び、考え、実践し、自分たちの学ぶ環境や社会のあり方を問い、協力して変えていく。その経験こそが、全社会の「先導者」を育む学びになると考えています。

「先導者」に必要なのは、新しさだけではありません。大切なのは確かな志と仲間への信頼を持ち、良識に基づき行動する人間性です。学生、教職員、卒業生、そして地域や世界の皆様と知恵を出し合い、身近な実践を社会の変化へとつなげていくことが大切です。慶應義塾は、世代や分野を越えた協働を通じて、持続可能な未来の創造に貢献してまいります。

一人ひとりの「自分ごと」が未来を拓く



SDGs担当常任理事
横田 絵理

慶應義塾におけるSDGs活動の歩みを一言で表すならば、まさに「現場からの実践」、そして「草の根の行動」です。福澤が掲げた「実学の精神」が今、各キャンパスの至る所で慶應義塾ならではの活動となっていることを強く実感しています。

その好例が、学生自らが問いを立てて行動するボトムアップの動きです。本年度も学生主体の「塾生会議」からは、コンタクト空ケースの回収や使用済み割り箸の資源化、地方出身生の孤食・不安に寄り添う「よる食堂」、料理教室など、身近な課題に対する柔軟なアイデアが次々と形になりました。ほかにも、自然の力を活かした「ヤギプロジェクト」による除草など、学生ならではの視点から生まれた取り組みが行われています。

大学全体の取り組みも大きく広がっています。それぞれの個性を尊重し合う場として設置された「協生ステーションarcoiris（アルコイリス）」は、誰もが自分らしくいられる居場所として利用者を広げています。こうした取り組みは、多様な人々や地域社会と共に生き、「誰一人取り残さない」というSDGsの精神を現場の工夫で具現化したものです。

サステナビリティへの道のりに、あらかじめ用意された「正解」はありません。だからこそ、一人ひとりが自ら考え、試行錯誤を重ねていくことが不可欠です。生徒・学生、教職員、卒業生、地域社会という多様なステークホルダーが、課題を「自分ごと」として捉え、支え合っていくことこそが慶應義塾の目指す持続可能な社会へのアプローチです。

本レポートには、単なる数値データだけでなく、慶應義塾に所属する関係者の情熱と実践の足跡が詰まっています。この記録が、皆様と共に未来のあり方を問い直し、次なる一歩を踏み出すきっかけとなれば幸いです。

Policy ポリシー

慶應義塾のサステナビリティ・ポリシー

慶應義塾ではサステナビリティを目指す取り組みを推進するため、
「慶應義塾協生環境推進憲章」、「慶應義塾環境理念」を掲げ、それらに基づいた各方針を定めています。
また、SDGsのゴール8「働きがいも経済成長も」への取り組みの一環として、採用ページに雇用に関する各方針を掲載しています。

慶應義塾 協生環境推進憲章

（2019年9月20日制定）

1 自他の尊厳に等しく敬意を払い、互いの人格を尊重し、協力し合う協生社会の実現を目指します。
2 多様な価値観への理解を深め、自分らしく生きることへの共感と配慮を育む啓発活動を推進します。
3 社会的障壁を取り除くことに努め、個々の選択に応じた生き方を実現できる環境を整備します。

男女共同参画基本理念
https://www.keio.ac.jp/ja/about/engagement/work-life-balance/initiatives/philosophy/

ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）の推進に関する基本方針
https://www.keio.ac.jp/ja/about/engagement/diversity/policy/

障害※3のある学生の支援のための基本方針
https://www.keio.ac.jp/ja/about/engagement/accessibility/policy/

ハラスメントについて 慶應義塾の基本方針
https://harass-pco.keio.ac.jp/guideline.html

慶應義塾大学病院　多様な性を尊重するための基本方針
https://www.hosp.keio.ac.jp/about/policy/diversity/

一般選抜 受験および入学後の配慮について
https://www.keio.ac.jp/ja/admissions/faculty/examinations/general-admissions/special-provision/

慶應義塾大学理工学部・理工学研究科　Keio Diversity, Equity, and Inclusion Goals（KeiDGs）
https://dei.st.keio.ac.jp/about-keidgs/

慶應義塾 環境理念

（2012年7月6日策定）

慶應義塾は教育・研究・医療における活動において、地球環境の保全と持続可能な循環型社会の発展に貢献します。また、教職員、塾生のひとりひとりが、地球生態系の一員であることの自覚と責任を持って、環境改善活動を推進します。

慶應義塾研究倫理要綱
https://drive.google.com/file/d/1amwxHdpDtaNv-azBps6MbSkdmghdunVt/view

雇用に関する方針

慶應義塾にとって「人」は何よりの財産です。慶應義塾で働く一人ひとりが豊かな人生を送り、それが持続可能であることを目指しています。そのために、職場環境の整備、健康と安全の確保、人材育成、能動的な働きを創出する人事制度や労働慣行に関する取り組みを実施しています。

慶應義塾職員採用情報　雇用におけるSDGsへの取り組みについて
https://www.keio.ac.jp/ja/jobs/hrm/sdgs/

※3 慶應義塾では、「障害者権利条約」および「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」の趣旨にある、「障害は人ではなく社会の側にあり、その「社会的障壁」を取り除くことが、私たちの責務である。」という考え方に立つ「社会モデル」を大切に考えています。そのため、「障害」は社会や環境の側にあるということをより意識する観点から「障害」の表記を用いていきます。

カーボンニュートラルの取り組み

慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けて

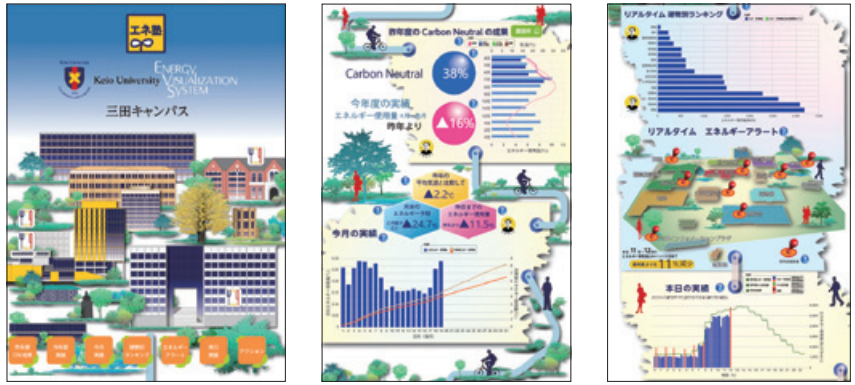
慶應義塾は2030年に電気使用量のすべてを自然エネルギーに転換することを目指します。

慶應義塾大学には6つのキャンパスがあり、大学病院や一貫教育校も含めると、それぞれのエネルギー使用量、使用形態、オンサイト太陽光発電のポテンシャルなどの条件は大きく異なっています。これらのキャンパスの特徴も勘案して、カーボンニュートラルに向けた具体的な検討を行っています。

▸2025年度に開始した取り組み

- 「ENERGY VISUALIZATION SYSTEM（エネルギー見える化システム）」公開

  脱炭素社会の実現と持続可能な運営を目指し、2025年12月に電力・ガス使用量を合算したエネルギー使用量をリアルタイムで可視化する「ENERGY VISUALIZATION SYSTEM」を三田キャンパス先行で導入しました。本システムは、電力とガスの使用量、CO_2排出量、概算光熱費を合算して一元管理し、パソコンやスマートフォンから即座に確認できるのが特徴です。ダッシュボードには使用量などの推移やこれまでの実績がグラフやランキングで直感的に表示され、学生や教職員の省エネルギーに対する行動変容を促します。また、収集されたデータは授業や研究プロジェクトのオープンデータとしても提供され、学生主体の省エネルギー提案を後押しする教育的基盤としての役割も担います。本システムの活用により、学内のエネルギーマネジメントの高度化を図るとともに、再生可能エネルギーの導入やカーボンニュートラルキャンパスの実現、教職員・学生との協働による環境改善プロジェクトを推進していきます。

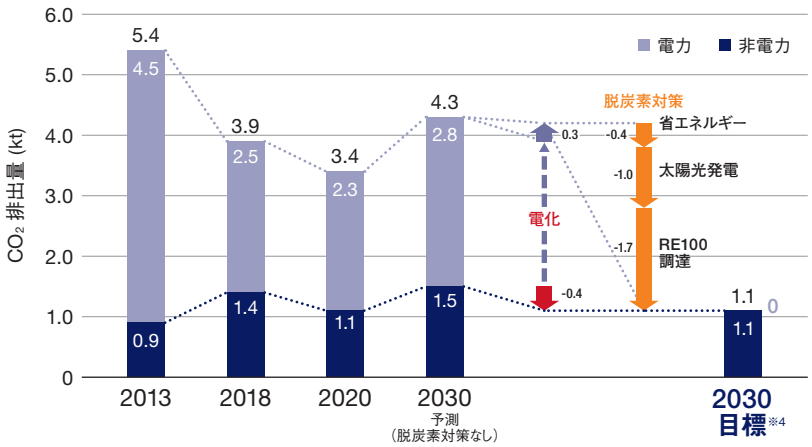


「ENERGY VISUALIZATION SYSTEM」

湘南藤沢キャンパス（SFC）におけるカーボンニュートラル

湘南藤沢キャンパス（SFC）では、慶應義塾全体のカーボンニュートラルに向けたモデルキャンパスとして、自然エネルギー電力への転換を実現するロードマップを作成しました。2030年を目標年として、照明器具のLED化、節電の徹底、建築物の省エネルギー性能の向上などによる省エネルギー、太陽光発電を中心とした再生可能エネルギーの導入、Renewable Energy 100%（RE100）電力の調達などによって電気使用量のすべてを自然エネルギーに転換します。キャンパスにおけるオンサイト太陽光発電のポテンシャル評価を行った結果、建物の屋上やカーポートの屋根などに太陽光パネルを設置することで、約30%のエネルギーを自給可能であることがわかりました。SFCでは、エネルギー自給率向上のため、地域バイオマス資源の発電利用のポテンシャル調査なども計画しています。また、カーボンニュートラルに関連する生物多様性や資源循環などの環境問題についても統合的に取り組んでいきます。

SFCのカーボンニュートラルへ向けたロードマップ



※4 脱炭素対策は2023年3月時点で想定している内容であり、今後の検討に応じて変更される可能性があります。

環境・資源保護の取り組み

湘南藤沢キャンパス（SFC）において、サントリーグループと協働し、「ボトルtoボトル」水平リサイクルを開始

湘南藤沢キャンパス（SFC）は、サントリーグループと連携し、キャンパス内で回収された使用済みペットボトルを新たなペットボトルへと再生する「ボトルtoボトル」水平リサイクルを、2025年9月より開始しました。本取り組みは、使用済み製品を同一種類の製品へと再資源化するもので、慶應義塾内では初の試みとなります。

今回の連携は、「リサイクル適性が高く、再資源化の仕組みが整っているペットボトルを資源として循環させ、持続可能な社会の実現に貢献したい」という両者の思いが一致したことにより実現しました。

SFCでは、2022年11月に2030年に向けたカーボンニュートラル目標を発表し、自然エネルギー大学リーグに加盟しました。さらに2023年からは、サステイナブルキャンパスプログラムを開始し、キャンパスの持続可能性向上をサステナブルな地域づくりへとつなげることを目指してきました。同プログラムは、総合政策学部、環境情報学部、看護医療学部、政策・メディア研究科、健康マネジメント研究科、湘南藤沢中等部・高等部が連携して進める教育研究プロジェクトであり、「カーボンニュートラル」、「資源循環」、「自然環境」、「健康と地域」、「食と農」、「スチューデントビルドキャンパス※5」、「高等部における環境プロジェクト」の7つで構成されています。あわせて、2023年以降はキャンパス内の分別方法と分別ボックスのデザインを一新し、学生主体で分別率向上に取り組んできました。特にペットボトルについては、キャップ・ラベル・ボトル本体の3分別を徹底し、資源としての品質向上を図っています。

一方、サントリーグループは、2012年に国内清涼飲料業界で初めてリサイクル素材100%のペットボトルを導入し、2030年までにペットボトルの「100%サステナブル化」を達成することを目指して、水平リサイクルの実用化を進めてきました。

今回の取り組みにより、SFCで丁寧に分別されたペットボトルの価値を活かし、より高度な資源循環を実現します。今後は、学生による意識啓発や行動変容の促進を通じて分別率のさらなる向上を図るとともに、キャンパスの持続可能性向上、地域との連携による社会課題解決に取り組んでいきます。



※5 学生・教職員・卒業生が協働し創り上げる滞在型教育・研究施設

2025年自然科学研究教育センター・シンポジウム「話そう、考えよう、SDGsと科学のこと」開催

2025年11月15日、日吉キャンパスにて、自然科学研究教育センター主催シンポジウム「話そう、考えよう、SDGsと科学のこと」を開催し、約40名が参加しました。本シンポジウムは、2030年までの達成を目指すSDGsに、科学技術がどのように貢献できるのかを参加者と共に考えることを目的に、SDGs関連分野の第一線で活躍する4名をお迎えして講演を行いました。

大沼あゆみ経済学部教授は、技術や生産物が市場に普及する仕組みを具体例と共に解説し、地球環境を支える経済の役割を示しました。続いて、Jリーフ株式会社の上原淳氏は、レタスの植物工場の現状と展望を紹介し、持続可能な食料調達の可能性を示しました。千代田化工建設株式会社の今川健一氏は、次世代エネルギーとして期待される水素の利活用について、コスト面も含めた展望を説明しました。最後に、清水建設株式会社の鵜山尚大氏より、月面太陽光発電「ルナリング」構想と月面建設技術を通じた将来のエネルギー供給の可能性が語られました。

講演後、総合質疑討論が行われました。登壇者と参加者が、2030年以降を見据えて、科学技術の未来像を具体的に構想し、共有する有意義な機会となりました。


銀杏並木とシンポジウムポスター


総合質疑討論の様子

信濃町メディアセンター（図書館）にウォーターサーバーを設置

信濃町キャンパスのメディアセンターでは、学生の多様な「学び」をサポートする環境整備の一環として、2026年3月、利用者からの要望が多かったウォーターサーバーを1階カウンター前に設置しました。マイボトルを持参すれば誰でも気軽に給水でき、館内全エリアへ「密閉可能な容器に入った飲物」として持ち込むことが可能です。マイボトルの利用を促進することで、使い捨てペットボトル等の削減にもつながる取り組みです。

慶應義塾では、今後も全キャンパスでのウォーターサーバーの増設や配置見直しを進めるとともに、認知度や使用率の向上に取り組んでいきます。

環境・資源保護の取り組み

土屋常任理事らがRENKEI気候変動・エネルギーワークショップに参加

2025年5月6日～5月9日、英国ニューカッスル大学ならびにダラム大学の主催でRENKEI（日英大学間連携プログラム）による気候変動・エネルギーワークショップが開催され、土屋大洋常任理事、武井良修法学部准教授、和田直樹環境情報学部准教授が参加しました。

4日間にわたるワークショップは、「Just Transitions to a Net Zero World（ネット・ゼロ社会への公正な移行）」をテーマに実施されました。日英両国のRENKEI加盟大学から集まった様々な分野の研究者が、大学・政府・企業・ローカルコミュニティ間の連携事例など、本テーマに沿った多様な研究プロジェクトについて学ぶとともに、グループワークを行いました。グループワークでは、都市環境・産業・政策・気候正義・環境公衆衛生といった視点から、日英の研究者がどのように連携し得るか議論を交わし、学際的な共同研究の可能性を模索しました。



ワークショップ参加者

Hヴィレッジに双子のヤギが入寮 ―学生主導のヤギプロジェクト―

湘南藤沢キャンパス（SFC）内学生寮「H（イータ）ヴィレッジ」に、双子のヤギ「カイくん」と「マユちゃん」が入寮しました。

本取り組みは、寮生が立ち上げた「ヤギプロジェクト」によるものです。外来種の雑草処理に苦慮していた寮父との会話をきっかけに、雑草を好んで食べるヤギの習性を活かした自然な力による除草の可能性に着目し、企画されました。ヤギの誘致のほか、クラウドファンディング、ヤギ小屋の建設も学生自らが手掛けました。

2頭はHヴィレッジ隣接地での除草を担います。ヤギによる除草は、化学除草剤を用いずに自然の力を活用する方法であり、生態系や土壌の保全にもつながる取り組みとして期待されています。


カイくんとマユちゃん

第24回「森を愛する人々の集い」開催

慶應義塾は、現在全国に義塾所有山林や国有林分収契約山林をあわせ約160ヘクタールにおよぶ山林を保有し、植林・育林活動を行っています。これらの活動を支援する目的で2001年に発足した「福澤育林友の会」主催による「森を愛する人々の集い」が、2025年6月14日に三田キャンパスにて開催されました。当日は同会の会員や学生など、約70名が参加しました。

24回目を迎えた今回は、一ノ瀬友博環境情報学部長が「南三陸慶應の森の自然環境と生物相」と題して登壇しました。講演では、バイオマスや農業、資源循環といった多様な視点から、環境課題の解決を目指す研究や活動が紹介されました。また、大学院生によるポスターセッションも実施され、志津川山林の自然環境と生物相について、活発な意見交換が行われました。


一ノ瀬環境情報学部長による講演

湘南藤沢キャンパス（SFC）2025年度キックオフレクチャー開催

2025年4月7日、湘南藤沢キャンパス（SFC）にて、新入生・在学生を対象に、学問に取り組む姿勢や社会の変化を捉える視点を養うことを目的としたキックオフレクチャーを開催しました。

2025年度は、一般社団法人エシカル協会代表理事の末吉里花氏に「これからの時代に必要なエシカルという“ものさし”」をテーマにご講演いただきました。末吉氏は、自身の経験を踏まえながら、エシカルの考え方や日常で実践できる行動について紹介しました。質疑応答では、学生からエシカルを自分事として捉える方法など多くの質問が寄せられ、持続可能な社会に向けた意識を深める機会となりました。


末吉氏による講演

DATA 環境負荷データ

慶應義塾では、環境負荷を軽減し、持続可能なキャンパスづくりを目指して、エネルギー使用量削減対策やごみの分別・資源化を推進しています。

▶ エネルギー使用量削減への取り組み

空調温度設定、照明設備の間引き点灯などのエネルギー消費設備の適正運用を実施するとともに、使用していない部屋の消灯や空調の停止、設備機器類の省エネルギーモードの設定の励行、照明器具のLED化などに取り組んでいます。

▶ プラスチックごみ削減への取り組み

全キャンパスへのウォーターサーバー設置によるペットボトル消費量の削減に加え、塾生会議を起点としたコンタクト空ケース回収ボックスを4キャンパスに常設し、使い捨てプラスチックごみの削減を進めています。

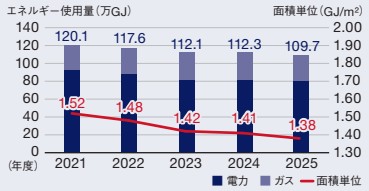
▶ 一般廃棄物の減量・資源化への取り組み

リサイクル可能な紙ごみと可燃ごみの分別を徹底することで、可燃ごみを減らし、環境に配慮したリサイクル実現に取り組んでいます。湘南藤沢キャンパス（SFC）では、分別方法を50音順で簡単に調べられる「ごみ・資源分別辞典」を作成・公開しています。

▶ 水道使用量削減への取り組み

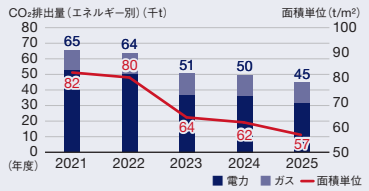
三田、日吉、信濃町キャンパスおよび大学病院では、雨水を処理し、再利用水としてトイレの洗浄水などに使用しています。また、湘南藤沢キャンパス（SFC）では、独立型自家用専用水道「地下水膜ろ過システム」を使用して井水を雑用水および飲料用として、信濃町キャンパスおよび大学病院では、災害用井戸システムを設置して日常的にも井水を雑用水として使用しています。

エネルギー使用量



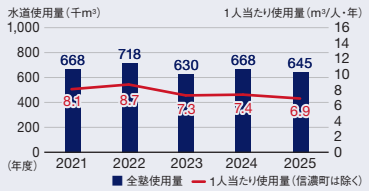
直近一年の変化 | 評価

CO_2排出量



直近一年の変化 | 評価

水道使用量



直近一年の変化 | 評価

再利用水（雨水）・井水利用量



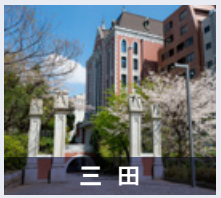
直近一年の変化 | 評価

廃棄物発生量と再利用率



直近一年の変化 | 評価

各キャンパスの環境負荷データ（2025年度）















	三田	日吉	信濃町	矢上	湘南藤沢	芝共立	一貫教育校
CO_2排出量（t-CO_2）	3,459	8,434	17,394	8,586	3,379	1,864	2,261
エネルギー使用量（GJ）	78,016	166,264	539,168	166,384	66,874	36,261	44,241
電気使用量（千kWh）	7,197	13,394	42,344	16,724	5,417	3,476	3,665
ガス使用量（千㎥）	352	1,123	3,851	486	477	138	279
水道使用量（千㎥）	46	134	319	52	23	15	55
廃棄物発生量（t）	202.8	462.8	1,804.3	252.9	212.1	136.8	—
廃棄物再利用率（%）	59.6	65.3	81.2	37.5	21.9	36.7	—

協生環境

協生環境推進室

慶應義塾は、教職員・学生・生徒・児童が、互いの人格を尊重し、多様な価値観を認め協力して生きるための環境の構築と多様性の受容に関する課題に迅速に対処するため、2018年4月1日に「協生環境推進室」を設置しました。また、2019年9月には「慶應義塾協生環境推進憲章」を制定し、「年齢・性別・SOGI（性的指向・性自認）・障害・文化・国籍・人種・信条・ライフスタイルなど、様々な背景を有する人々が、誰一人として社会から孤立したり排除されたりすることなく、互いの尊厳を尊重し合う社会」の実現を宣言し、様々な背景を持つ人々が互いに尊重・協力し合う協生社会の実現を目指しています。この宣言の実現に向け、協生環境推進室では、多様な価値観を共有・発信するプラットフォームを基盤に、慶應義塾がこれまで培ってきた知見を共有しながら、ワーク・ライフ・バランス、バリアフリー、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）の事業推進やこれらの理念を尊重する環境や制度の整備など、一貫教育校から大学・大学院、大学病院までを包含した全塾的な取り組みを推進しています。

「独立自尊」・「他尊」のキャンパスを目指して

〔 私たちが考える協生環境とは 〕

異なる価値観に敬意を払い、互いの尊厳を認め合いながら、
社会的固定観念と心身の制約を乗り越え、
一人ひとりが自分の選択に応じた生き方を実現できる社会

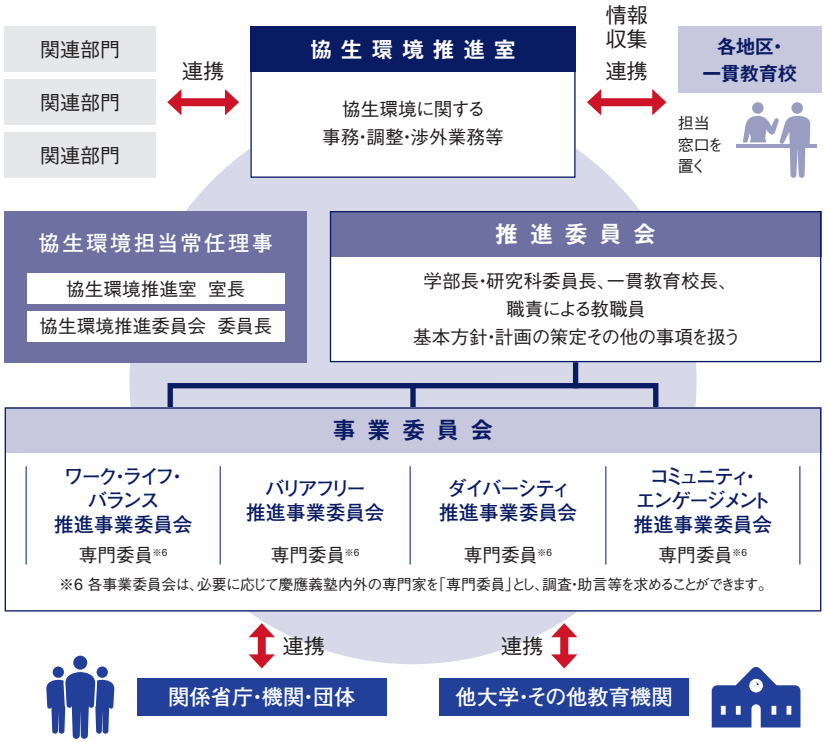
〔 協生環境に込められたメッセージ 〕

異なる価値観への理解、互いの人格を尊重する姿勢、
そして何より自分らしく生きることへの共感と配慮

ダイバーシティを受容・推進できる組織こそ発展・成長できる

体制図

協生環境推進室は、担当常任理事の下に推進委員会を設け、その下で4つの事業委員会が活動を行っています。



協生環境推進室Webサイト | https://www.keio.ac.jp/ja/org/diversity/

協生環境の取り組み

「協生ステーションarcoíris」開設

慶應義塾は、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）を尊重する環境を整え、一人ひとりが互いに助け合い、理解を深めながら協生社会を先導していくことを目指す「Pride Commitment」の一環として、2025年6月に「協生ステーションarcoíris（アルコイリス）」を開設しました。

「協生ステーションarcoíris」は、ジェンダー、セクシュアリティ、障害、人種、文化など、私たちの間に存在する様々な違いを“違い”ではなく、“個性”として尊重し、理解しあうことを目指す情報発信と交流の場です。学生および教職員が誰でも安心して利用できる安心・安全な空間として、静かに読書や勉強に集中したい時の利用のほか、話したいことや相談したいことがある時には、コーディネーターと対話することも可能です。

名称の「arcoíris」はスペイン語で「虹」を指し、希望や未来、多様性、架け橋といったポジティブな意味を持っています。異なる色が調和して一つの美しい虹を成すように、多様な個性が共に生き、響きあう社会の実現に向けて、「協生ステーションarcoíris」は、学生・教職員にとっての居場所となることを目指しています。

主な取り組みとして、ジェンダーやセクシュアリティ、生活、キャリア、就職・就労に関する個別相談を受け付け、相談者が安心して思いを話せる機会を提供しています。また、DEI推進の拠点として、学内の関連組織や各種相談窓口と連携し、全学的な支援体制の構築を進めています。さらに、誰もが安心して過ごせるキャンパスを目指し、学内の環境や制度のバリアフリー化を推進するとともに、「協生環境推進ウィーク」などを通じた啓発・情報発信、ワークショップや勉強会の開催にも取り組んでいます。

慶應義塾は、「協生ステーションarcoíris」を通じて、多様性を尊重する文化のさらなる醸成に努めていきます。



協生ステーションarcoíris



安心して過ごせるようにパーテーションで区切られたブース

多様な利用者に応える大学図書館を目指し、第22回メディアセンター研修会を開催

メディアセンターでは、2025年11月21日、「どうすればよい?大学図書館の『合理的』配慮 ～多様な利用者と状況に応えるために～」をテーマに、第22回メディアセンター研修会を開催しました。本研修会は、メディアセンター職員をはじめ、関心を持つ教職員が参加できる機会として企画されました。

2024年4月に改正障害者差別解消法が施行され、大学を含むすべての事業者において合理的配慮の提供が義務化されました。これにより、学内の事務部門や教育・研究支援の現場において、障害のある学生・教職員を含む多様な利用者への対応の重要性が一層高まっています。大学図書館であるメディアセンターにおいても、図書館サービスの提供や職場環境の整備において、合理的配慮をどのように理解し、実践していくかが重要な課題となっています。

本研修会では、「改正障害者差別解消法や読書バリアフリー法を踏まえた大学図書館の役割」、「障害のある学生への合理的配慮と多層的な支援」、「誰もが安心して力を発揮できる職場づくり」をテーマに、専門家による講演が行われました。法制度に関する知識をアップデートするとともに、大学としての合理的配慮に関する課題や捉え方を学び、大学図書館の現場対応や職場環境を中心に、「どのように考え、どのような備えをするべきか」を改めて考える機会となりました。

職員メンタリング・プログラムの実施

2022年度より実施している「教員メンタリング・プログラム」の成果を踏まえ、2025年度秋に「職員」向けのメンタリング・プログラムを試行的に実施しました。

本プログラムは、慶應義塾も加盟しているAPRU（The Association of Pacific Rim Universities:環太平洋大学協会）の「Asia-Pacific Women in Leadership（APWiL） Mentoring Program」の特徴やノウハウを取り入れたものです。メンターとメンティーが双方に学び合い、教え合うことで、慶應義塾の草創期からの精神の一つである「半学半教」の実践を目指しています。

多様な部署や世代の職員が、メンター・メンティーとして対話を重ねたほか、他大学見学会などのワークショップを通じて交流を深め、お互いのキャリアや業務に対する視野を広げる契機となりました。

2026年度からは正式なプログラムとして始動する予定です。



職員メンタリング・プログラム修了式

協生環境の取り組み

「Girls Meet STEM at 慶應理工2025: 女子中高生のためのキャンパスツアーと座談会」開催

2025年8月1日、理工学部は、女子中高生を対象としたキャンパスツアーおよび座談会「Girls Meet STEM at 慶應理工2025:女子中高生のためのキャンパスツアーと座談会」を矢上キャンパスで開催し、中高生と保護者あわせて41名が参加しました。

理工学部では「創発」を基本理念に、ダイバーシティ・エクイティ&インクルージョン（DEI）を重視した教育・研究環境づくりを進めています。本イベントは、理工系分野に関心を持つ女子生徒に最先端の環境とリアルなキャンパスライフを体感してもらい、将来の選択肢を広げることを目的に実施しています。

当日は、イノベーション施設「Yagami Innovation Laboratory（YIL）」や「共同実験室」、「量子コンピューティングセンター」、「マニュファクチュアリングセンター」などの見学を通じて、理工学部における最先端の研究・教育環境への理解を深めました。また、在学生との座談会では、研究や留学、サークル活動などに関する活発な質疑応答が行われ、参加者が理工系分野での学びや将来の進路に期待を膨らませる場となりました。


共同実験室の見学


座談会の様子

米国AHEAD有識者招聘特別企画を共催

2025年10月17日、AHEAD JAPAN（一般社団法人全国高等教育障害学生支援協議会）主催の米国AHEAD有識者招聘特別企画に、協生環境推進室が共催として参画しました。改正障害者差別解消法の施行に伴い、障害学生支援が新たな局面を迎える中、本企画は、障害のある学生の学修や生活をより充実させるとともに、社会人への移行を支える取り組みを強化し、日本の高等教育における障害学生支援の発展に貢献することを目指して実施されました。

当日は、米国で50年にわたり積み重ねられてきた障害学生支援の経験や実践について、講演やトークセッションを通じた共有が行われました。支援のコーディネートにおいて重要となる概念や考え方、実務のあり方を学び、今後の高等教育における障害学生支援の充実に向けた実践的な示唆を得ました。

「協生環境推進ウィーク2025」開催

2025年11月28日～12月16日、「協生環境推進ウィーク2025」を開催しました。本企画は、慶應義塾における協生環境の実現に向けて、協生環境推進室が取り組む「ワーク・ライフ・バランス」、「バリアフリー」、「ダイバーシティ」、「コミュニティ・エンゲージメント」の4つの活動をテーマに、生徒・学生・教職員をはじめとする参加者が多様性への理解を深め、誰もが安心して学び、働き、生活できる環境づくりについて考える機会として実施したものです。期間中は、講演会やセミナーなど全6企画を開催しました。

11月28日の「ジェンダー・セクシュアリティ論公開講座」では、LGBTQA+の若者の調査から見えてきた課題を取り上げました。大規模調査を基に、いじめや孤立、社会的偏見がメンタルヘルスに及ぼす影響や、友人・仲間、居場所、性的マイノリティーを理解し支援するアライ（Ally）の活動、いじめ防止の仕組みといった「つながり」が若者のウェルビーイングを支える重要な力となることを共有しました。12月2日には、「“性”の多様性」をテーマに、多様な背景を有する人々が互いの尊厳を尊重し合う社会のあり方について学びを深めました。さらに12月5日には、肉乃小路ニクヨ氏を迎えたトークショーを開催し、自分の頭で考え、言葉にしながら自分らしい人生を築くことの大切さについて考える機会としました。

また、ワーク・ライフ・バランスの観点から、12月11日にKINDプログラム・介護セミナー「仕事と介護を両立させる秘訣～介護は突然やってくる、その時に慌てないために～」を開催し、介護の事前準備、介護保険サービスの利用法、仕事と介護を両立させるポイントなどについて専門家から学びました。12月12日開催のCAREセミナー「自己表現ができる!アサーションスキルを学ぼう」では、自分も相手も大切にするコミュニケーション手法や、心理的安全性のある職場づくり、人間関係の形成について理解を深めました。

最終日となる12月16日には、日本初のオストメイトモデルであり医師でもあるエマ・大辻・ピックルス氏による講演「アカペラを生きる～人工肛門と私の人生リスタート～」を開催し、難病との闘いやストーマ（人工肛門）造設の経験を伺いました。障害や疾病の有無にかかわらず、自分らしく生きること、多様な身体や生き方を尊重することの意義を考える機会となりました。


エマ・大辻・ピックルス氏講演

DATA 女性が占める割合

志願者数
（一般選抜 / 各年度4月1日時点）



直近一年の変化 | 評価 😐

入学許可者数
（一般選抜 / 各年度4月1日時点）



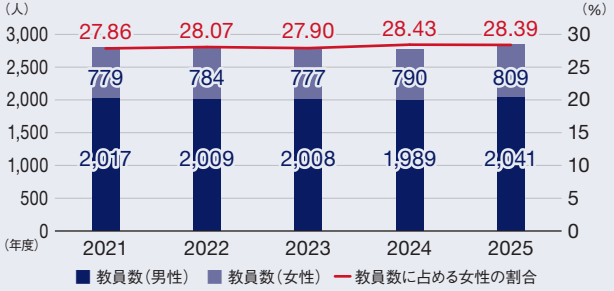
直近一年の変化 | 評価 😐

卒業者数
（全学部 / 各年度実績）



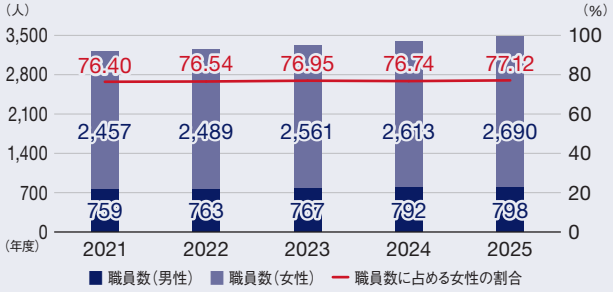
直近一年の変化 | 評価 😊

教員数
（常勤 / 各年度5月1日時点）



直近一年の変化 | 評価 😐

職員数
（常勤 / 各年度5月1日時点）



直近一年の変化 | 評価 😊

健康・福祉の取り組み

薬学部長主催特別講演会「世界の創薬の現状と日本の課題―産業からの視点―」開催

2025年6月4日、芝共立キャンパスにて、中外製薬株式会社名誉会長（元代表取締役社長）・慶應義塾評議員の永山治氏をお迎えし、薬学部長主催特別講演会「世界の創薬の現状と日本の課題―産業からの視点―」を開催しました。

講演では、永山氏から世界の創薬の現状と日本の医薬品産業の課題、それに対する中外製薬株式会社の取り組みが紹介され、学生・教職員ら115名が熱心に耳を傾けました。続くROUND TABLE DISCUSSION「不確実な時代を生き抜くために、今何をすべきか?」では、キャリアや研究の意義について活発な意見交換が行われました。



講演する永山氏

体験型ワークショップ「未来の介護テクノロジーを考えよう!」を開催

2025年8月6日、殿町タウンキャンパスは、世界最先端の研究開発拠点キングスカイフロントにおいて開催された小学生対象の体験型イベント「第11回 キングスカイフロント夏の科学イベント2025」に参画し、企業4社との協働により、小学校高学年向けワークショップ「未来の介護テクノロジーを考えよう!」を実施しました。参加した児童は、ゲームを通して身体動作を読み取るセンサー技術、血液中の物質を外から測定する技術、脳からの指令として出る微弱な生体信号をキャッチすることで病気やけがによる歩行困難者が意思にあわせて動くことのできる技術、歯の神経を再生させ健康な歯に戻す歯髄再生治療技術、眼鏡に映像を映すことで長時間のテレビやパソコンの視聴が困難な高齢者や身体の不自由な人も楽しむことができる技術などの最先端テクノロジーを体験し、発見した課題の解決に向けたアイデアを提案しました。

APRU第29回年次学長会議出席、「人類の長寿とその課題」について議論

2025年6月22日～6月24日、米国・サンディエゴで開催されたAPRU（The Association of Pacific Rim Universities:環太平洋大学協会）第29回年次学長会議に、伊藤塾長および土屋大洋常任理事が出席しました。会議には、APRU加盟大学の学長ら120名以上が集い、「Human Longevity in a Changing World: Innovation, Education, and Leadership for a Resilient Future（変化する世界における人類の長寿:イノベーション、教育、そしてレジリエントな未来のためのリーダーシップ）」をテーマに、人類の長寿とそれに伴う社会的・科学的課題について活発な議論が交わされました。

パネルディスカッション「AI and Longevity: Global Challenges and International Research Collaboration（AIと長寿:グローバルな課題と国際共同研究）」では、伊藤塾長がモデレーターを務め、高齢化研究の最前線をいく百寿総合研究センターの取り組みを紹介するとともに、グローバルな課題解決における国際連携の重要性を訴えました。



パネルディスカッションの登壇者　（写真提供:APRU）

シンポジウム「パブリックヘルス（公衆衛生）の現代的課題を考える」開催

2025年7月1日、三田キャンパスにて、X Dignityセンター主催シンポジウム「パブリックヘルスの現代的課題を考える」を開催し、産業界、官公庁、学術機関、民間団体など多様なセクターから90名を超える参加者が集まりました。シンポジウムでは、SNS利用が子どもの心身の健康に与える影響や国内外における規制・法的紛争の現状、地球環境と人間の健康を一体的に捉える「プラネタリーヘルス」をテーマに、研究者、行政関係者、医療・政策分野の専門家が意見を交わしました。分野を超えた対話を通じて、健康、情報環境、地球環境をめぐる課題に対し、領域横断的な連携を深める重要性を共有する機会となりました。

健康・福祉の取り組み

「DWIH東京シンポジウム:高齢化社会を支えるイノベーション」を共催

2025年10月7日、三田キャンパスにて、ドイツ科学・イノベーションフォーラム東京（DWIH東京）主催による「DWIH東京シンポジウム:高齢化社会を支えるイノベーション」をケルン大学と共催しました。日独の大学、政府、企業から多くの専門家が集い、健康的な高齢化に向けた革新的な解決策や国際連携について活発な議論が交わされました。伊藤塾長は、国際的かつ学際的な研究拠点として国内外で高い評価を受けている百寿総合研究センターにおける活動や慶應義塾が加盟している日英パートナーシップ「RENKEI」での実績を挙げ、高齢者、特に100歳以上のセンテナリアンに焦点を当てた慶應義塾の多面的かつ複雑な研究への継続した取り組みを紹介しました。パネルディスカッションやポスターセッションでは、高齢化社会が直面する課題への解決策や国際連携戦略について意見交換が行われました。



ポスターセッションの様子

2025年度藤沢市民講座「誰もが自分らしく暮らせるまちへ:藤沢発・共生社会のつくり方―看護医療学部開設25周年に向けて―」開催

2025年11月、湘南藤沢キャンパス（SFC）にて、2025年度藤沢市民講座を開催しました。本講座では、「医療的ケア児や障害のある方、自宅療養者が地域で暮らし続けるための支援」、「孤独・孤立の予防に向けて善行団地を舞台に看護学と社会学の視点から進められてきた地域参加型研究（CBPR）」、「地域福祉の視点から『社会的つながり』がもたらす影響」などを全3回にわたって取り上げました。藤沢市や地域の福祉・看護関係者と共に、誰もが自分らしく暮らせる協生社会の実現に向けて連携して取り組む意義を考える機会となりました。

市民公開講座「がんの薬物治療はここまで進化した!最新のがん薬物治療 ～がんになる前に、なった後も知っておきたいこと～」開催

2026年1月18日～1月25日、薬学部は市民公開講座「がんの薬物治療はここまで進化した!最新のがん薬物治療 ～がんになる前に、なった後も知っておきたいこと～」をオンデマンド配信にて開催しました。本講座では、がん研究会有明病院院長補佐・薬剤部長の山口正和氏を講師にお迎えし、最新のがん薬物療法の現状と、治療効果を高めるうえで重要となる早期発見につながるがん検診の意義について取り上げました。最新の医療知識を深め、自身や家族の健康管理について考える機会となりました。

ワークショップ「最先端の医療機器でリアルな医療体験を!」開催

2025年8月2日、予防医療センターにて、第2回「最先端の医療機器でリアルな医療体験を!」ワークショップを開催しました。本取り組みは、医学的知見を社会に還元し子どもたちに学びの場を提供することを目的に、麻布台ヒルズが実施するサマープログラム「ヒルズ・ワークショップ フォー・キッズ2025」の一環として開催されたものです。昨年に引き続き、中学生を対象に本物の医療機器に触れる体験学習の機会を提供しました。

当日は、医師や看護師、技師に加え、医療系学部生の救命救急措置法普及活動サークル「KAPPA（Keio ACLS Popularizing and Promoting Association）」所属学生の指導の下、内視鏡検査、超音波検査、一次救命処置（AED等）の体験学習を行いました。参加した中学生からは「医療への興味がとても湧いた」「AEDの実際の使い方が学べて良い機会になった」といった声が寄せられました。

予防医療センターでは、今後も健康や医療への理解を深める次世代教育活動を継続していきます。



胸骨圧迫とAEDによる一次救命処置の実践

塾生会議

塾生会議

「塾生会議」は、フランスやイギリスで行われている気候変動対策や温室効果ガス削減対策を国民の側から提言する会議にヒントを得て、慶應義塾SDGsの一環として、学生の意見を本学のSDGsの取り組みに反映させるために発足しました。

大学の全学部から公募と無作為抽出で選抜された学生が、専門家のアドバイスを受けながらディスカッションを重ね、SDGsを実現するための慶應義塾のヴィジョン・目標・ターゲットを提言することを目的として、2022年6月から活動を開始しています。

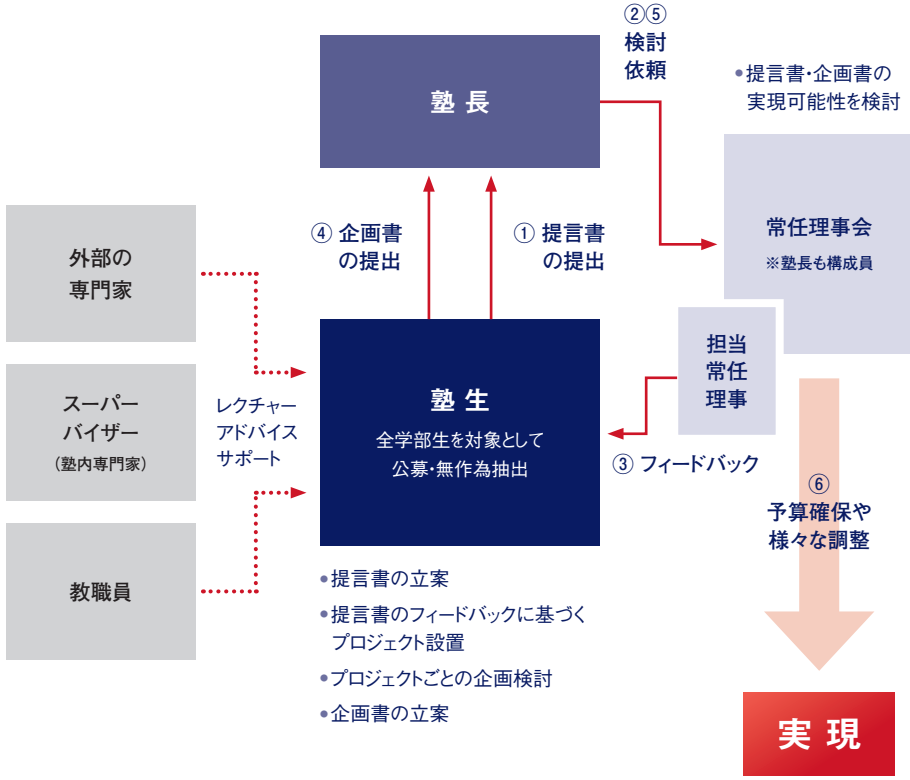
夏には、塾生会議のメンバーに加え、慶應義塾の一貫教育校の児童・生徒、メンバー以外の大学生の希望者の総勢約100名が参加する「慶應義塾SDGs会議―サマー・キャンプ―」を開催し、年齢の違いを超えてSDGsについて議論しています。

塾生会議が1年間の活動を通じて取りまとめた17のゴールを踏まえた提言は、最終提言発表会で塾長に直接提出され、塾長と参加学生の間でさらに踏み込んだ意見交換が行われます。提出された提言については、塾長を中心に検討・議論され、慶應義塾の取り組みや次年度の塾生会議の活動につなげられています。



SDGsカードゲームを行う塾生会議メンバー

体制図



塾生会議プロジェクトの活動

塾生会議から提出された提言の中から審査を経て採択されたものは、学生が主体となる「塾生会議プロジェクト」として具体化され、様々な活動へと発展していきます。
2025年度の各プロジェクトの活動内容を紹介します（継続プロジェクトを含む）。

料理教室プロジェクト

ひとり暮らしによる孤食や、外食が増えた学生へ栄養バランスのとれた健康的な食生活を促すため、履修登録科目には無い「家庭科」として調理を学ぶ場を提供するプロジェクトです。「共に調理し共に食べる」体験を通じた学生同士の交流による心身の健康サポートだけでなく、規格外野菜の活用や無駄を出さない調理方法の習得による環境配慮・フードロス削減も目指しています。
料理教室は、2025年6月11日、11月4日、2026年1月14日の計3回、株式会社グリーンハウス（https://www.greenhouse.co.jp/）の管理栄養士のご協力の下、日吉キャンパスで実施し、延べ71名の学生が参加しました。手軽で実践的なメニュー調理に加え、食材の知識やアレンジ法も学べる内容とし、好評を博しました。また、2025年11月にはさらに、「食のSDGs」をテーマとしたトークイベントも開催し、3名の登壇者に「ビーガン向け和食」について講演していただきました。



料理教室ポスター


調理を行う学生

慶應生と日吉の街の交流プロジェクト

SDGsゴール11「住み続けられるまちづくりを」の実現のため、慶應義塾が地域社会で果たすべき役割を学生と地域住民の交流を通じて考えながら、「近くて遠い慶應義塾大学」から「街の誇りの慶應義塾大学」へと変革していくことを目指すプロジェクトです。日吉キャンパス近隣の小学生を対象としたイベントや地域行事への参加を通して、学生と地域住民が自然に交流できる機会を創出します。
2025年11月と2026年2月、小学校1・2年生を対象とした「大学生ブックキャラバン」を実施し、それぞれ50～60名が参加しました。本企画は、慶應義塾の学生がキャンパス近隣の小学校や学童を訪問し、本をテーマにしたワークショップを実施することで、本や大学を身近に感じてもらうことを目的としています。11月は、絵本の読み聞かせを通してSDGsについて学んだ後、小学生がSDGs達成のために自分ができる行動を考え、絵で表現する「SDGsカレンダーづくり」を実施しました。2月には、SDGsをテーマにしたカルタを通して学んだ後、子どもたちが学んだ内容の中から伝えたいことをクイズにする「SDGsカルタ&クイズ大会」を実施しました。SDGsカルタは放課後キッズクラブおよび日吉台小学校へ寄贈し、イベント後も多くの子どもが継続してSDGsについて楽しく学べる環境づくりを目指しました。
2025年8月には、普通部通りで開催された夏祭りに学生スタッフとして参加しました。当日は、SDGsに関するクイズを掲示したブースを設置し、正解者がスタンプを押すSDGsスタンプラリーの台紙を印刷したうちわの配布を行いました。祭りを楽しみながらSDGsについて学ぶ機会となっただけでなく、地域住民が主体となって開催する行事に慶應義塾の学生が参加することで、地域と学生の交流機会にもなりました。


SDGsカルタで遊ぶ児童


クイズ発表の様子

塾生会議プロジェクトの活動

地方学生プロジェクト

SDGsゴール10「人や国の不平等をなくそう」の理念に基づき、地方出身生への支援を通じて、慶應義塾における学生の多様化を推進するプロジェクトです。

「地方出身×ひとり暮らし」の学生を主な対象とし、入学前後や大学生活における不安を軽減するためのソフト面での支援を実施しています。「2030年までに地方出身生の割合を40%まで回復させる」ことを目標とし、多様な背景を持つ学生同士の交流や議論を促進することで、新たな価値の創出や社会課題の解決につながる環境づくりを目指しています。

2025年3月19日と3月27日、地方出身の新入生が入学前に抱える疑問や不安を解消することを目的として、オンラインでの入学前交流会を開催しました。在学生による、実体験を踏まえた大学生活やひとり暮らし事情などの話を聞けるほか、新入生同士や在学生と交流できる機会となりました。

また、2025年4月2日～4月4日の3日間、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」の協力の下、夕食を無料で提供する「よる食堂」イベントを開催しました。「地元愛を伝えよう」「ひとり暮らし自炊問題解決」などのテーマを設定し、不安を抱える入学直後の地方出身の新入生が交流できる場を設けました。

さらに、健康面や精神面、交友関係等ソフト面での包括的支援を目的としたデジタルパンフレット「Unlimited Vol.3」も昨年度に引き続き作成し、入学前交流会や「よる食堂」参加者に配布しました。



よる食堂の様子



Unlimited Vol.3

ごみ箱改革プロジェクト

「『ごみ箱改革』を起点に『持続可能な慶應義塾』を実現する」ことを目指し、「2050年までに慶應義塾のリサイクル率を100%にする」すなわち「ごみ箱の異物混入率を0%にし、ごみを資源として100%活用することで、塾内で資源の循環を達成する」をゴールに掲げているプロジェクトです。

日吉キャンパスを中心に実施してきた、ごみの分別啓発活動を、2025年度は他キャンパスに広げるほか、割り箸回収活動も本格化させ、「より多くの学生・教職員がごみの分別や資源循環を習慣化すること」を目的に活動しました。

2025年10月～2026年1月、三田キャンパスにごみの分別を啓発するポスターを掲示しました。また、2025年10月～2026年2月には、日吉キャンパスの学生食堂「グリーンズマルシェ」に使用済み割り箸回収ボックスを設置し、5カ月で約21,400膳（約85.6kg）の割り箸を回収しました。回収した割り箸は製紙工場に送られ、紙の原料として生まれ変わります。割り箸を資源として活用できるとともに、燃やすごみの削減にもつなげることができました。





ごみ分別啓発ポスター



回収された割り箸

コンタクトケース回収プロジェクト

SDGsゴール12「つくる責任・つかう責任」とゴール14「海の豊かさを守ろう」を実現し、2030年までにプラスチックごみを20%削減することを目指すプロジェクトです。独自のアンケート調査から、学生の約60%が使用していると想定されるコンタクトレンズに着目し、コンタクト空ケース回収ボックスを設置し、常時回収を可能にしました。

昨年度は日吉キャンパスのみに設置していた回収ボックスを、2025年度は日吉・矢上・三田・SFCの4キャンパスに常設しました。また、2025年10月1日～12月31日には、回収量上位者に慶應パーカー、カレッジバッグ、ルーズリーフ等を贈呈するイベントも開催しました。結果として、昨年度2,841個であった回収量を12,000個にまで伸ばすことができ、学生の意識と行動が習慣化してきていることがうかがえました。

Keio SDGs News

日吉キャンパスで藤山記念館のリノベーションセレモニー開催
―FUJIYAMA MEMORIAL HALL RENOVATION PROJECT―

2025塾生会議ガイダンス実施

薬学部生考案
健康応援メニュー「血糖値ガパオ」
全国24箇所の食堂で提供

「慶應義塾SDGs会議
―2025塾生会議サマー・キャンプ―」を開催

志木高等学校
志木の森ツアー（夏）開催

2025年
4月 5月 6月 7月 8月 9月

Pick up

Keio University RANKED 101–200

| 6月 |

THE Impact Rankings 2025に慶應義塾大学がSDGsゴール16で世界80位にランクイン

国際連合が提唱するSDGsの達成度により社会に対する大学の貢献度（インパクト）を測定することを目的とした世界大学ランキングTHE Impact Rankings 2025において、慶應義塾大学はゴール16「平和と公正をすべての人に」で、世界80位にランクインしました。7回目となる2025版には、世界130の国や地域から2,540機関（大学）が参加しました。

16 平和と公正をすべての人に
80位

| 6月19日～8月30日 |

春季企画展「ある一家の近代と戦争―上原良春・龍男・良司とその家族」を開催



熱心に鑑賞する来場者

福澤諭吉記念慶應義塾史展示館にて、2025年度春季企画展「ある一家の近代と戦争―上原良春・龍男・良司とその家族」を開催しました。本展では、慶應義塾に学び、戦争で命を落とした上原良春・龍男・良司の三兄弟の足跡を中心に、上原家に残された遺品や写真、手紙などの資料を通じて、日本の近代化と戦争について考える機会を提供しました。戦後80年を迎える中、残された資料を通じて戦争の記憶を次世代へ継承することを目指した企画です。また、2025年7月12日には特別座談会「上原家、80年後の証言」を開催しました。上原家のご家族や関係者を迎え、三兄弟と共に過ごした日々や、戦争によって一変した家族の姿、平和への思いが語られました。企画展と座談会を通じて、来場者が戦争の記憶と向き合い、平和の大切さを改めて考える貴重な機会となりました。

| 7月10日～8月31日 |

「慶應義塾と戦争―モノから人へ―」大阪特別企画展を開催



戦争の記憶を伝える当時の資料

慶應大阪シティキャンパスにて、大阪特別企画展Ⅲ「慶應義塾と戦争―モノから人へ―」を開催しました。戦後80年を迎え、戦争を実体験として語ることのできる人が少なくなる中、慶應義塾福澤研究センターでは、2013年より「慶應義塾と戦争」アーカイブ・プロジェクトを発足し、戦争期の慶應義塾に関する資料の収集や所在把握を継続して行っています。本企画展では、昨年三田キャンパスで開催された企画展のダイジェスト版に加え、大阪会場のみで公開される新資料も展示しました。残された資料を通じて、戦争の記憶を次世代へどのように受け継ぎ、過去から何を学ぶことができるのかを考える機会となりました。

| 9月20日 |

教職課程センター公開研究会「世界の子ども達に等しい教育の機会を」開催

教職課程センターは、慶應義塾の卒業生で、UNICEFや世界銀行をはじめとする国際機関で教育コンサルタントを長年務めてこられた野呂（中島）朋子氏をお迎えして、オンラインで公開研究会「世界の子ども達に等しい教育の機会を」を開催しました。野呂（中島）氏からは、数々の障壁によって子どもたちが安心して学校に通うことが難しくなっているウガンダの事例を中心に話題提供をしていただきました。教職課程を履修している学生たちと共に、今日不登校が増加している日本でも問われている「なぜ学校に通わないといけないのか?」という子どもの視点からの問いを、普遍性と地域性の両面から改めて深く検討する貴重な機会となりました。

Keio SDGs News

大学発ベンチャー企業数（慶應義塾大学）（2025年10月末日現在）が473企業、日本国内第3位に（2026年6月経済産業省発表）

ボランティア活動支援室発足

慶應義塾大学病院 2025年度信濃町地域防災コミュニティー防災訓練を実施

日本国内で司法試験 最終合格者数（118名）・最終合格率ともに全国第3位

「アリシャバナ ESCAP 事務局長との意見交換会:アジア太平洋における SDGs の実施と Beyond SDGs」開催

2025塾生会議　最終提言を塾長に提出

志木高等学校 志木の森ツアー（春）開催

10月 11月 12月 2026年 1月 2月 3月

| 11月 |

慶應義塾図書館旧館 ナノブロック進呈



図書館旧館ナノブロック

慶應義塾では、「KEIOみらいストーリーズ（みらい共創資金）」の寄付特典として、慶應義塾図書館旧館を再現したオリジナルナノブロックを期間限定で進呈しています。1912年に創立50年記念事業の寄付金によって建設された図書館旧館は、国の重要文化財にも指定されている歴史的建築物です。慶應義塾の歴史と伝統を象徴する建物を寄付者への記念品として形にすることで、慶應義塾の文化資源への関心を高めるとともに、学生の学びを支える「社中協力」の精神を次世代へ継承しています。
また、ナノブロックは環境負荷低減にも配慮しています。レンガ部分には製造過程で廃棄される樹脂を活用したリサイクルプラスチックを使用しており、資源の有効活用に貢献しています。特殊な成形技術により、一粒ごとに微妙に異なる色合いが生まれ、本物のレンガ造りを彷彿とさせる世界に一つだけの風合いを楽しめる仕様となっています。

| 11月27日～11月28日 |

国際刑事裁判所（ICC）・慶應義塾大学主催 アジア太平洋学術フォーラムを開催



オープニングセッションの様子

「ICCアジア太平洋学術フォーラム（ICC Asia-Pacific Academic Forum）」を三田キャンパスにて開催しました。本フォーラムは、ICCとMoU（基本合意書）を通じてパートナーシップを締結しているアジア太平洋地域の10大学が一堂に会する初の試みです。会場では、ICCが直面している危機的状況において、国や地域を超えて国際司法の一翼を担う本枠組みの重要性が確認されたほか、ICCへの学術的理解の促進や将来の学術協力のあり方が議論されました。この開かれた学術交流を通じて、今後ICCの任務に関する対話が促進され、国際刑事司法の発展に向けた地域の関与がさらに強化されることが期待されます。

| 3月 |

慶應義塾図書館所蔵 「論語疏 巻第六」が国宝に指定



「論語疏 巻第六」

文化審議会の答申が出され、慶應義塾図書館所蔵の「論語疏 巻第六」が、重要文化財指定から1年を経て、年内に国宝に指定されることが決まりました。本資料は、中国南北朝末から隋時代の6世紀頃の写本とみられ、『論語』の紙の伝世写本としては世界最古とされる貴重な典籍です。慶應義塾では、「慶應義塾大学論語疏研究会」を組織し、部局の枠を越えて調査・研究を進めてきたほか、早稲田大学等の協力も得て検証を重ねてきました。今回の国宝指定は、慶應義塾が培ってきた学術研究と、文化財保存・発信に向けた取り組みが結実したものです。今後も、世界的に価値ある学術・文化遺産の適切な保存と公開・活用に努めていきます。